

# 初年次教育を加えた 情報リテラシー教育科目のリデザイン： 共通ルーブリックの活用

田中 洋一・帆谷 和浩<sup>1)</sup>・諏訪いずみ<sup>1)</sup>・竈谷 隆弘<sup>2)</sup>・島田 貢明

(2020年3月4日受理)

## Re-Designing the Information Literacy Course as Jin-ai First-Year Experience Program: Using the Common Rubric

Yoichi TANAKA・Kazuhiro HOTANI・Izumi SUWA・  
Takahiro KAGOYA・Mitsuaki SHIMADA

要旨：本学 初年次教育プログラムの一部として、教養科目の情報リテラシー教育科目をリデザインした。本科目では、レポート作成及びプレゼンテーションに関する本学共通ルーブリックを活用することとした。本稿では、本科目の授業設計を中心として、本学生活科学学科の初年次教育プログラムについて報告する。

Key words：共通ルーブリック, 初年次教育, 情報リテラシー教育

### 1. はじめに

仁愛女子短期大学（以下、本学と記す）は生活科学学科（以下、本学科と記す）及び幼児教育学科からなり、本学科は生活デザイン専攻、生活情報専攻、食物栄養専攻の3専攻制である。本学では、2020年度より全学的な初年次教育プログラムを開始する。両学科ともに、初年次教育プログラムは2科目からなる。1科目は両学科共通であり、教養科目の情報リテラシー教育科目「情報メディア入門」である。もう1科目は、本学科は「生活科学論」、幼児教育学科は「文章表現の基礎」である。以上3科目とも、必修科目であり、学生全員が履修する。筆者が所属する生活情報専攻（以下、本専攻と記す）では、以前から初年次教育プログラムを展開していたが、文部科学省「平成30年度 私立大学等改革総

合支援事業調査票」において「大学教育に必要な学修方法の習得等を目的とした総合的なプログラムとしての初年次教育を全学的に実施していますか。」という設問があり、本学でも全学的なプログラムを実施することとした。

2019年度まで本専攻が独自に取り組んできた初年次教育プログラムは、必修科目「生活情報論」「生活科学論」、選択科目「日本語表現演習Ⅰ」「日本語表現演習Ⅱ」からなる。「生活情報論」では、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、表現力（書く、話す、話し合う）、実行力というジェネリックスキルを演習やワークショップを通して身につける。「生活科学論」では、衣・食・住・情に関する4つのシナリオに基づいた課題解決型学習を通して、問題解決能力を身につける。「日本語表現演習Ⅰ」

1) 非常勤講師

2) 仁愛大学

では、批判的思考にもとづき、聴く・話すという技能を身につける。「日本語表現演習Ⅱ」では、アカデミック・ライティングを通して、読む・書くという技能を身につける。本稿では、共通ループリックを活用する情報リテラシー教育科目「情報メディア入門」のリデザインを中心として、本学の初年次教育について報告する。

## 2. 初年次教育とは

「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（中央教育審議会，2008）によれば、初年次教育は、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」と説明される。

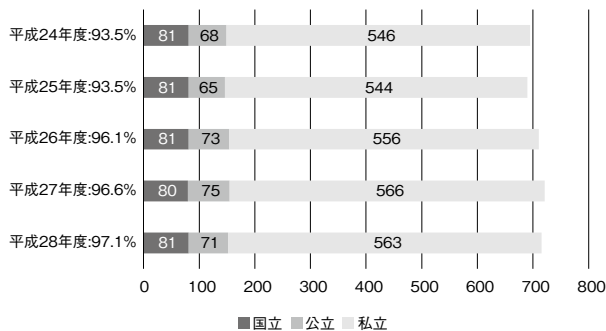


図1. 初年次教育を学部段階で実施している大学

文部科学省が毎年調査している「大学における教育内容等の改革状況について（平成28年度）」によれば、「初年次教育を実施する大学は、平成28年度においては、715大学（約97%）で、その内、学部全体で実施している大学は623大学（約85%）となっている。」本調査は、全大学（国公立776大学、短期大学を除く）を対象として、平成29年12月～平成30年2月までに回答した結果を集計したものである。回答率は98%（758大学。うち、学部段階の母数は国立82大学、公立80大学、私立574大学の計736大学）である。初年次教育を実施している大学に関する5年分の調査結果を図1に示す。平成24年度において既に93.5%の大学が実施していたため、大きな経年変化は見られない。

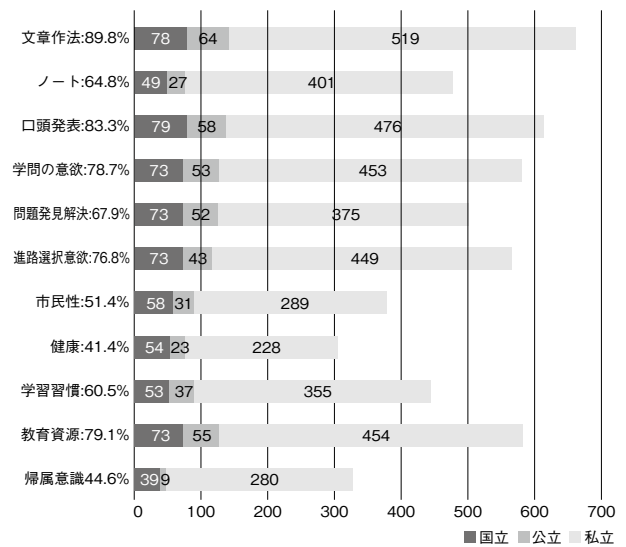


図2. 初年次教育（具体的内容）の実施率（平成28年度）

初年次教育の具体的内容に関する調査結果（平成28年度）を図2に示す。図2では、初年次教育の具体的内容に関して、下記のとおり略称で示してある。

- 文章作法：レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム。
- ノート：ノートの取り方に関するプログラム。
- 口頭発表：プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム。
- 学問の意欲：学問や大学教育全般に対する動機付けのためのプログラム。
- 問題発見解決：論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム。
- 進路選択意欲：将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラム。
- 市民性：社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観育成のためのプログラム。
- 健康：メンタルヘルス等、精神的・肉体的健康の保持に関するプログラム。
- 学習習慣：学生生活における時間管理や学習習慣を身に付けるためのプログラム。
- 教育資源：大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身に付けるためのプログラム。
- 帰属意識：自大学の歴史等を題材とした、自大学への帰属意識の向上に関するプログラム。

平成28年度の実施率を比較すると、「レポート・

論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム」が最も高く89.8%、「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム」が2番目に高く83.3%、「大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身に付けるためのプログラム」が3番目に高く79.1%である。実施率は低いが個人的に重要だと考える項目は、以下の2つである。1つめとして「社会の構成員としての自覚・責任感・倫理感育成のためのプログラム」は51.4%である。この項目は市民性と捉えることができ、とても大切な態度であるが、初年次教育として実施することは時間的に難しいといえる。2つめとして「自大学の歴史等を題材とした、自大学への帰属意識の向上に関するプログラム」は44.6%である。この項目は大学へのエンゲージメントと捉えることができ、私立大学としてはとても大切である。本学では、教養必修科目「人間と仏教Ⅱ」のアッセンブリアワー（仏教行事）を通して、帰属意識の向上を図っている。

本専攻では、学科共通科目「生活科学論」に、シナリオを用いたProblem Based Learning（広島大学型PBL）を2017年度から導入して、初年次教育へリデザインした。2018年度からは本学科・生活デザイン専攻、2019年度からは本学科・食物栄養専攻でも同様な授業設計へ変更した。この科目では、3回分で1つのPBLとなっており、1回目はグループワークによる課題発見。シナリオを読んだ後、グループごとに付箋やホワイトボード等を用いて興味・関心を可視化した上、発表テーマや調査項目を話し合う。2回目は、学習計画にもとづき個別に学習してきた成果物をグループで共有した上、発表用スライドや原稿を作成する。3回目は、各グループが発表して、質疑応答及び相互評価を行う。4つのシナリオ（衣・食・住・情）を用いるが、各シナリオにもとづき、8グループが発表をした後、一人ひとりがレポートを作成する。このように、「生活科学論」は実践型の初年次教育科目として設計されている。

2019年度に「生活科学論」を履修した本専攻学生が最終回において、この授業を振り返って記述した振り返りシートから意見を下記に紹介する。振り返

りシートから判断しても、この科目は初年次教育として機能しているといえる。

- 自分の力で課題を見つける力が身についた。
- 人前で発表する苦手意識が少し克服できた。
- チームメンバーと協力して一つの活動を行う際、相手を尊重して行動する力を身につけた。
- 他者とコミュニケーションをとる機会が増え、自分の意見を相手に伝えられるようになった。
- 情報収集する際、一つの記事だけではなく、誤情報が無いようにネットで多くの記事を調べたり、書籍等でも調べたりすることが多くなった。
- 「文章から疑問点を出す→グループで意見を出し合う→テーマを決め、各自調べ学習→個別学習を共有し、話し合いながら1つのスライドにまとめる→発表」の流れを繰り返すことにより、苦手だった本サイクルに慣れてきた。
- プレゼンの際、予想される質問を考え、回答を用意しているうちに、緊張感がなくなり、たくさん質問して欲しいと思えるようになった。その結果、自信を持つことができた。
- 話したことがない人と話すことが苦手だったが、自分の意見を言うように心掛け、少し克服できた。
- 決まった時間内に伝えたいことを言う力が身についた。
- グラフにまとめたデータにもとづき、主張を伝えることを有効的に使っていきたい。
- 自分たちの発表に対する相互評価を見て、スライドの文字の大きさや話すスピードに対する修正点に気づけた。
- チームの対話でテーマを決めるため、1つのテーマから自分が考えもしない多様なテーマやアイデアがでた。
- 他の発表に対して、たくさんの質問ができ、わからない点を理解できた。

### 3. 情報リテラシー教育とは

本学では教養科目において、全学的に情報リテラシー教育科目「情報メディア入門」(以下、本科目と記す)が開講されている。幼児教育学科に開講する

本科目を筆者が2007年にリデザインした。大きな変更点は、保育現場での真正な学習に近づくように、すべての教材や課題を保育者向けに修正したことである。15回分の授業計画は下記のとおりである。

- 1回目：本学のコンピュータ環境やネットワーク利用規程の説明、メールの設定
- 2回目：Windowsの基礎、タイピングソフトの登録、タイピング練習
- 3回目：メールの使い方やマナー
- 4回目：メールの応用、検索のしかた①
- 5回目：検索のしかた②
- 6回目：検索のしかた③、共有フォルダ、Windowsの便利機能
- 7回目：文書作成の基礎「保護者向けチラシ」
- 8回目：表を活用した文書作成「実習ノート」
- 9回目：画像を活用した文書作成「園だより」、情報倫理
- 10回目：表計算①関数、表「カレンダー、体重変化」
- 11回目：表計算②グラフ「虫歯」
- 12回目：表計算③絶対参照、関数「運動能力測定」
- 13回目：表計算④ソート、抽出、条件判定「名簿」
- 14回目：プレゼンテーション①操作方法
- 15回目：プレゼンテーション②自己紹介スライド

上記のように、Windows操作、タッチタイプ、メール送受信、Web検索（OPAC含む）、文書作成（Word）、表計算（Excel）、プレゼンテーション（PowerPoint）を15回で学ぶ。初年次教育に近い内容であるが、保育者としてICTを活用するロールプレイという位置づけが強いため、大学生としてのICT活用とは異なっている。図2に示される、文章作成やプレゼンテーションに関する回があるが、WordやPowerPointの操作スキルに重点が置かれ、レポート作成の流れや引用方法、調べ学習におけるプレゼンテーションの流れや配慮についてはほとんど触れられていない。ただし、初年次教育として、図2において実施率の高い3つの項目「①レポート・論文の書き方などの文章作法、②プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法、③大学内の教育

資源（図書館を含む）の活用方法」を導入しやすい科目であるのは間違いない。そこで、2020年度より本科目を必修科目とし、少なくとも3回分を初年次教育プログラムとしてリデザインすることにした。その3回とは、①情報収集の方法、図書館の活用、②レポートの書き方、③プレゼンテーションの技法である。

#### 4. 共有ループリックとは

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（中央教育審議会、2012）の用語集によれば、ループリックとは、「米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある。」とされる。ダネル・スティーブンスら（2014）によれば、ループリックを使う理由としては下記6つがある。

- タイミングの良いフィードバック
- 学生による詳細なフィードバックの活用
- 批判的思考力のトレーニング
- 他者とのコミュニケーションの活性化
- 教員の教育技法の向上
- 平等な学習環境作り

栗田ら（2017）によれば、ループリックは、課題、評価観点、評価尺度、評価基準からなり、ループリックの評価として、信頼性、客観性、妥当性、効率性（実現可能性）が重要である。筆者は、2017

表1. ループリックの形式  
課題. ○○○○○○○○。  
(例：プレゼンテーションのためのループリック)

| 観 点   | 評価尺度1<br>(例：理想的) | 評価尺度2<br>(例：標準的) | 評価尺度3<br>(例：要改善) |
|-------|------------------|------------------|------------------|
| 評価観点1 | 評価基準1-1          | 評価基準1-2          | 評価基準1-3          |
| 評価観点2 | 評価基準2-1          | 評価基準2-2          | 評価基準2-3          |
| 評価観点3 | 評価基準3-1          | 評価基準3-2          | 評価基準3-3          |

年8月に東京大学にて栗田らが実施した「インタラクティブ・ティーチング」Bigリアルセッション第2回「ルーブリックを極める」に参加した。そして、そのノウハウを用いて、2018年5月に本学FD研修会「ルーブリックとアクティブ・ラーニング」を開催した。

3章で紹介した情報リテラシー教育科目「情報メディア入門」では、2020年度は学科・専攻別に4名の教員（うち、非常勤講師1名）が担当する。担当者が異なると、初年次教育の指導方法や評価方法にズレが生じる可能性がある。また、他の科目においても、レポート作成やプレゼンテーションを課す教員は多く、その教授方法（引用文献の表記方法等）や評価方法も専門性によりバラバラである。そこで、2020年度から学生及び教員に対して、本学の共通ルーブリックを公開することとした。もちろん、全教員に対して、共通ルーブリックの使用を義務づける訳では無く、学生に対して、このような指導をしている旨を伝え、可能ならば活用してもらえようと呼びかける予定である。このような共通ルーブリックの活用は、FDの一環とも考えている。

本来は、本学独自の共通ルーブリックを作成すべきであるが、いろいろな文献調査の結果、東北学院大学ラーニング・コモンズ「コラトリエ」が作成したライティングルーブリック及びプレゼンルーブリックの評価観点や評価基準が適切である上、自己点検用チェックリストも付記されていることから、2020年度は本学でも活用させていただく予定である。

## 5. おわりに

コラトリエ・ルーブリックを本学幼児教育学科教員等に紹介し、数名に対して半構造化インタビューを実施した結果、下記のような意見があった。

- 本来は、本学 各学科専攻の文脈にあったルーブリックを作成すべき。
- 初年次教育としては、評価観点を絞って評価することから始めるべき。
- 教員により、カスタマイズして使用したい。
- 全教員ではなく、数名でもなく、半数程度の教員が活用するのが望ましい。

- プレゼンルーブリックの観点が多い場合、プレゼンの中身を聴けなくなる。
- 「序論・本論・結論」というパラダイムではない分野もある。
- 図表は絶対に必要なのか。
- 誤字脱字を明確にすべきではないか。

スモールステップで評価観点を絞る意図はわかるが、インストラクショナル・デザインとしては、まずは最終ゴールを見せる必要があると考えている。その上で、今回のミニレポートは3つの観点で評価する等、基礎学力が低い学生やモチベーションが低い学生へ配慮して、スモールステップで最終ゴールに近づけさせる方略は可能であろう。

教員全員、すべての科目、すべてのレポートやプレゼンテーションに対する共通ルーブリックの作成は無理といえる。ただし、一度、「型」を学ばせる意義はあり、個別の事例に関してはカスタマイズしていく必要がある。

## 引用文献

- 1) 文部科学省(2018)「平成30年度 私立大学等改革総合支援事業調査票」, [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2019/02/26/1413852\\_09.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2019/02/26/1413852_09.pdf), (2020年2月28日閲覧)
- 2) 中央教育審議会(2008)「学士課程教育の構築に向けて(答申)」, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm), (2020年2月28日閲覧)
- 3) 文部科学省(2019)「大学における教育内容等の改革状況について(平成28年度)」, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/fieldfile/2019/05/28/1417336\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/fieldfile/2019/05/28/1417336_001.pdf), (2020年2月28日閲覧)
- 4) 吉田香奈, 小澤孝一郎, 於保幸正, 古澤修一, 西掘正英, 田地豪(2013)『学生の主体的学びの確立に向けた授業方法の改善—教養ゼミへの PBL の導入—』京都大学高等教育研究第19号, pp.25-36.
- 5) 中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2020年2月28日閲覧)
- 6) ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ(2014) 佐藤浩章・井上敏憲・俣野秀典(訳)『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部。
- 7) 栗田佳代子ら(2017)『インタラクティブ・ティーチング—アクティブ・ラーニングを促す授業づくり』河合出版
- 8) 東北学院大学ラーニング・コモンズ コラトリエ (2019)「ライティングルーブリックver2.0」及び「プレゼンルーブリックver2.0」, <https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/colatelier/>

[news\\_support/2936.html](https://news_support/2936.html) (2020年2月28日閲覧)